

43. 大酒家の肝硬変症における肝シンチグラム

箕輪 孝美 黒木 哲夫

門奈 丈之

(大阪市大・三内)

越智 宏暢 浜田 国雄

(同・放)

大酒家の肝硬変症における肝シンチグラムの臨床的意義を明らかにする目的で、非大酒家における肝硬変症との比較検討を行なった。

対象：腹腔鏡下肝生検により組織学的に診断しえた肝硬変症 112 例 (大酒家 46 例、非大酒家 66 例)。大酒家とは HBs 抗原陰性で、1 日 3 合、10 年以上の飲酒例とした。

成績：①大酒家群では非大酒家群に比し、肝腫大型が多く、右葉萎縮型は少ない傾向を示す。②シンチグラム上肝腫大像を認める場合、非大酒家群に比し、大酒家群では肝機能異常は軽度であることが多いが、静脈瘤や腹水の頻度は高い。③肝シンチによる経過追究例では大酒家の肝硬変の末期像は、肝萎縮像を呈するとは限らず、腫大像のまま死亡する例も多い。④大酒家群では Hepatoma の合併頻度は低い。

44. 肝内門脈あるいは副行路によって肝シンチグラム上欠損像を示した 3 症例

中村 仁信 北谷 孝嗣

(国立大阪病院・放)

原田 貢士 吉岡 寛康

佐藤 正之 黒田 知純

打田日出夫

(阪大・放)

肝シンチグラムにおいて、space occupying lesion 以外の、false positive の欠損像を呈するものとして、さまざまな原因が挙げられるが、肝内門脈による欠損は成書に記載されておらず、文献的にも 1975 年 Shanser ら、1976 年斎藤らの報告をみるのみである。われわれは最近 2 年間に門脈が原因であることを血管造影で証明した 3 例を経験した

ので報告する。

1 例目は 54 歳女性で、肝硬変があり、肝シンチグラムで、両葉萎縮、脾腫、骨髓像の他に、肝門部に欠損像が疑われた。上腸間膜動脈造影の静脈相で肝門部に拡張した門脈がみられ、シンチグラムの欠損像と一致した。

2 例目は 22 歳の男性で、肝シンチグラムで肝門部から末梢に向かって消失していく欠損像があり、血管造影で肝門部に拡張、蛇行した collateral vein が多数みられ、本来の門脈は閉塞していると思われ、collateral による欠損像と診断した。

3 例目は 61 歳女性で、肝シンチグラムで両葉の腫大と、正中部に肝門部から上方へ走り、屈曲して左方へ走る細長い欠損像があり、門脈左枝によるものであることが、血管造影で確認された。

1 例目はこれまでの報告と同様に肝硬変による門脈拡張が原因であるが、2 例目の門脈血栓症に伴う collateral が原因となった報告は皆無である。

3 例目は正中部の肝実質の菲薄化に原因があるが、きわめて明瞭に門脈の走行が捉えられていた。

45. 肝シンチグラムで defect を呈した原発性アミロイドーシスの一症例

柏木 徹 西村 恒彦

木村 和文

(阪大・中放)

中川 彰史 鎌田 武信

阿部 裕

(一内)

アミロイドーシスは、糖蛋白を主成分とするアミロイドが全身諸臓器に沈着するび慢性疾患と考えられている。このような慢性疾患であるにもかかわらずアミロイドーシスの肝シンチグラムで focal defect を呈する場合があることが報告されており、われわれも同様の症例を経験したので報告する。

症例は 74 歳の女性で、黄疸を主訴として入院した。^{99m}Tc phytate 3 nCi による肝シンチグラム

で、著明な肝腫大と肝右葉外側に space occupying lesion の存在が認められ、肝癌と診断した。死亡1週間前の同様の肝シンチグラムで、右葉外側の space occupying lesion の存在とともに頭蓋、胸髄、腰髄、骨盤など骨髄細内系と肺への RI の著明な集積が認められたが、脾への集積は軽度であった。剖検では、肝重量は 1,850 g まで腫大していたが、肝シンチグラムで defect を若起せしめるような腫瘍は全く認められず、組織所見で高度のアミロイド沈着が認められた。その他脾、腎におけるアミロイドの沈着も高度であった。

この症例の場合、肝シンチグラムでの focal defect は、アミロイドの沈着により生じたと考えられる。また骨髄、肺への RI 異常集積は、肝、脾におけるアミロイドの高度沈着によりこれらの臓器取り扱いがきわめて低下したため生じたと考えられる。

46. 肝シンチグラムと肝 CT 像について

河合 武司 前田 裕子
小川 翼 西上 英昭
福田 徹夫 金崎 美樹
赤木 弘昭

(大阪医大・放)

目的：肝シンチグラムと、肝 C.T. スキャン像の比較検討を行なった。

使用装置および方法：シンチカメラは、中央演算処理装置を接続したガンマーカメラを用い、3方向から撮影しました。C.T. ホールボディスキャンは、EMI, C.T. 5005/12 を使用しました。スキャン時間は1スライス20秒、1検査8スライスでスライスの厚さは13mmです。記録は6つ切りフィルム、ボラロイド写真にて行ない、読影は、IVC および写真にて行ないました。

対象：1977年2月8日から6月16日の約4か月間に行なった C.T. スキャンは 879 検査あり頭部 586 検査 66.7%、肝臓 58 検査 6.6% でした。後者の内、肝シンチグラムを行なった 34 例を対象

としました。

結果：肝シンチグラムで Space Occupying Lesion (S.D.L.) と読影した 18 例の内、6 例は C.T. スキャンでも異常は認めず経過観察中です。肝シンチグラムで S.O.L. と読影できなかった 17 例中 2 例は、C.T. スキャン Cyst と読影可能でした。

結語：肝シンチグラムは、肝全体の形態的な観察と、C.T. スキャンの位置づけには有利でした。C.T. スキャンは、Cyst と実質性腫瘍の診断には、有利な検査法と考えます。今後、肝臓病変の診断は、肝シンチグラムと肝 C.T. スキャンの総合的診断により、向上するものと考えます。

47. 骨シンチグラフィーにおける肝の描出について

越智 宏暢 中塚 春樹
中村 健治 玉岡 紅一
佐藤 守男 池田 穂積
浜田 国雄 玉木 正男
(大阪市大・放)

^{99m}Tc-EHDP を用いて 1 日 4~5 例の骨シンチグラフィーを行なっているが、過去 1 年間に 3 症例において肝がつよく描出された。それら 3 症例について肝機能検査、血液の電解質などには異常がみられなかった。原因を検討したところ、3 人の患者に静脈注射を行なう際非常に困難で、何度か失敗し最終的に注入された時には注射器内に血液が混入して赤色を呈した状態であったことが原因であろうと考えた。そこで、家兎を用い ^{99m}Tc-EHDP と血液をあらかじめ混ぜ、振盪した後に静注するとすべての家兎において肝がつよく描出した。^{99m}Tc-pyp. についても同様のシンチグラムが得られた。屠殺後の臓器分布をみると、肝、脾、骨髄の分布が正常群のそれらに比し数倍多いことがわかった。網内系組織に多く集積していることから、in vitro において何らかの作用でスズコロイドができるものと考えられる。